

<研究ノート>

重要な存在であることは人生に意味を与えるか ガイ・カヘインとジョシュア・グラスゴー

森岡正博*

1 はじめに

人生の意味の哲学でよく議論になるテーマとして、社会の中で重要な人物であるほうが、重要でない人物であるよりもより大きな人生の意味を持つのか、という問いがある。たとえば、マンデラやマザー・テレサのような重要な人物の人生のほうが、朝から晩までテレビでくだらない番組を観ているだけの人生よりも大きな意味を持つだろうというのである。この考え方を支持する哲学者は多いが、もし本気でそのように考えるならば、多くの一般人の人生にはあまりたいした意味がないことになりかねない。

この論点は、いわゆる人生の宇宙的な意味の問題ともつながる。宇宙の巨大さに比べれば、人間の存在など一点の染み以下である。やがて人類も地球も消滅するであろうし、それは広大な宇宙にとっては何の意味もない。宇宙の視点から見れば、人類や人間の存在などほとんどまったく重要ではない。マンデラやマザー・テレサであれ、宇宙の巨大さの前ではまったく重要さを持たないのである。したがって、すべての人間の人生は等しく意味がないと考えることも可能である。

このテーマをどう考えるのかについては、鈴木生郎が「広大な宇宙のなかでちっぽけな人生に何の意味があるのか」という論説を2023年に執筆している。鈴木は、デイヴィッド・ベネターとガイ・カヘインの二論文をコンパクトに紹介したのちに、自身の見解を展開する。

本稿では、鈴木論説と内容が重なることになるが、まずカヘインの論文を紹介し、その後でジョシュア・グラスゴーが2024年に刊行した著書『重要な

* 早稲田大学人間科学部教授

電子メール：<http://www.lifestudies.org/jp> の送信フォームより

存在であることへの衝迫—我々の宇宙的非重要性の非重要性について』のなかからいくつかの論点を抽出して吟味することにする。本稿ではこのテーマに関するこれらの文献の紹介をメインとし、将来の考察のための研究ノートとした。

2 カヘインの「宇宙的非重要性」

ガイ・カヘインは2014年に「我々の宇宙的非重要性 Our Cosmic Insignificance」という論文を *Noûs* に刊行し、広大な宇宙の中で人類の存在に意味があるのかどうかについて考察した。この論文はその後にいろいろな議論を誘発した重要なものであるため、その内容を概観しておきたい。

いま私は「insignificance」を「非重要性」と翻訳したが、この翻訳でいいのかどうかはまず問題になる。辞書を引くと、significance には、重要性、影響の大きさという意味のほか、意味、意義という語義がある。そこでまずカヘインがこの語を用いる文脈を確認しておく。

カヘインは、宇宙は巨大だが我々は非常に小さいと言う。宇宙の果てしない巨大さに比べれば、「人間の生命 (life) は、まったくもって insignificant であるようにも見える」(746 頁)。カヘインはこれを「宇宙的な insignificance の感覚」とも言い換える。彼はここでパスカルの『パンセ』にある有名な箇所を引用する。カヘインの引用する英文を、そのまま英語から日本語に直訳しておく。

私の人生の短い継続が、その前と後にある永遠へと飲み込まれており、私の占めるこの小さな空間が、私がそれについて何も知らずまたそれも私について何も知らないところの無限の巨大な空間に囲まれているのを考えるとき、私は怖れを感じる。この無限の空間の永遠の沈黙が私を怖れさせる (746 頁)。

カヘインの論文中には『パンセ』断章 205-206 とある。『パンセ』の原文は当然フランス語である。本稿の議論から逸れるが、以下の事実を指摘しておかなくてはならない。この文章が 205-206 に置かれているのは『パンセ』ブランシュヴィック版である。現在のパスカル研究においてブランシュヴィック版はほとんど

用いられていない。断章の配置は写本を重視するという方針を取ったラフュマ版によって根本的に改訂され、現在ではその方針に準拠した版が用いられる。ラフュマ版では、「私の人生の短い継続が・・・私は怖れを感じる」は断章 68 であり、「この無限の空間の永遠の沈黙が私を怖れさせる」は断章 201 である。パスカルの意図を忠実に再現しようとしたラフュマ版では、この二つは並んでいない。さらに言えば、ラフュマ版であっても、カヘインの依拠しているブランシュヴィック版であっても、断章 68 の「私は怖れを感じる」の後には、非常に重要な文章が存在している。ラフュマ版の断章 68 と 201 を松浪信三郎の翻訳から引用しておこう。

68 私の一生の短い期間が、その前と後につづく永遠のうちに没し去り、私の占めている小さい空間、いやむしろ、私が見ているこの小さい空間が、私を知りもせずまた私の知りもしない無限の空間のうちに沈んでいるのを考えるとき、私は自分がここに居てかしこに居ないということに、恐れと驚きを感じる。というのも、何ゆえにかしこに居ないでここに居るのか、何ゆえかの時に居ないで現にこの時に居るのか、全然その理由がないからである。誰が私をここに置いたのか？ 誰の命令、誰の指図によって、この時この所が私に当てがわれたのか？ 「ただ一日とどまれる客の思い出」
201 この無限の空間の永遠の沈黙は、私に恐怖をおこさせる。

カヘインの引用では、断章 68 の「というのも」以下の文章がすべて削除され、断章 201 の「この無限の」以下の文章がその箇所にシームレスに嵌め込まれている。まるで全体が一個の断章であるかのように見える引用の仕方である。カヘインは 2008 年版のオックスフォード大学出版の英訳のペーパーバックを参考文献にあげているが、私が Google Books で見ることのできた 1995 年と 2020 年のオックスフォード大学出版の同名の書籍では、「というのも」以下の文章は存在しており、なぜカヘインの引用がこういう形になったのかは判明しなかった。とりあえず以上のことを指摘しておく。

さて、本題に戻ると、パスカルは、私が占める空間と時間の小ささを指摘し、私を取り囲む空間の無限性と対比させる。これは『パンセ』の他の断章にも繰り返し登場するパスカルの根本的な人間観である。カヘインはこの箇所を引用し、

この状況を人間の「*cosmic insignificance*」と呼ぶのである。パスカルに即して考えると、*insignificance* とは、宇宙の無限の大きさに比べたときの、人間の空間的・時間的な小ささを指している。

そのうえで、カヘインは、しかし我々人間はほんとうに宇宙的に *insignificant* なのだろうかと問う。カヘインは、人間の *significance* を、空間や時間の大小長短とは別の視点から再定義しようと試みるのである。

カヘインは、人間の *significance* はその空間的・時間的・巨大さによって規定されるのではなく、その *importance* によって規定されるのだと主張する。

何か *significant* であるためには、それが *important* であることが必要だ。真の違いを生み出せることが必要なのだ（749 頁）。

では、*importance* とは何なのだろうか。

何か *important* になるためには、違いを生み出すに足る価値をそれが持っていたり、生み出したりすることが必要であり、またもし何か *important* であるのなら、それは我々の注意や関心を引くに値しているのだ、ということをごここで述べておけば十分である。逆に言えば、もし何か *insignificant* であるとすれば、それは注目に値しないということであるし、気にかけるに十分なほど *important* ではないということだ（749 頁）。

回りくどい言い方をしているけれども、カヘインが言いたいのは、人間の *significance* は、その空間的・時間的な大きさを測られるものではなく、人間の *importance* で測られるのだということである。カヘインはさらに次のようにも書いている。

物の *cosmic significance* はシンプルにその *importance* を指しているのであり、したがって、それがどのくらいの注目に値するかを指しているのである。それは、すべての事柄を字義通り考慮に入れたときの、不偏不党な視点から見られたときに、という性質のものであるが（750 頁、イタリックは

元論文)。¹

要するに、カヘインにとって人間の宇宙的 *significance* とは、人間の宇宙における *importance* のことであり、人間が宇宙においてどのくらいの注目に値するかということなのである。ここまでの文脈を確認して言えるのは、カヘインの場合は *significance* も *importance* も日本語で「重要性」あるいは「重要な存在であること」と訳しておいて問題ないということである。

ここから先のカヘインの議論は一直線に進む。広い宇宙を見渡しても、いまのところ人類以外に生命体は発見されていない。もし人類のほかに生命体がないと仮定すると、宇宙の中で人類だけが特別に考慮に値すべき存在である。

「我々が価値ある唯一のものなのであり、したがって、*cosmically significant* である唯一のものでもあるのだ」(754 頁)。パスカルやラムゼイが指摘するように、人間は思索することができ、愛することができる。これは他の生物には見られない、素晴らしい内在的価値である。「我々は宇宙でもっとも価値を持っているものであり、(他の地上の感覚ある存在と比べて) 宇宙の全価値のもっとも偉大な部分を間違いなく占めているのだ」(754 頁)。もし地球上の生命が絶滅してしまえば、それは宇宙における価値の終焉かもしれないのだ。

カヘインはさらに、アンティークのような物に外在的な価値があるのはそれが希少 (*rare*) だからだと主張する。これは人類にも当てはまる。「もし我々が唯一の存在なのならば、地上の有感生物や、地上の知性を持った生物はさらにそうなのであるが、それらはまったくもって信じがたく希少でありスペシャルなのだ」(755 頁)。そしてこの希少性は、宇宙が巨大であればあるほど増大する。

「というのも、我々を取り巻く宇宙が巨大で空虚であればあるほど、我々は間違いなくさらにいっそうスペシャルで希少なものとなるのだ」(756 頁)。パスカルは宇宙の無限の巨大さを怖れたが、それは思い違いなのであり、逆に、宇宙が巨大であればあるほど人類の存在の希少性はそれだけいっそう光り輝き、人類の重要性はますます増大するのである。だから宇宙が巨大で空虚であるというのは、人類の重要性にとって望ましいことなのである。

では、もし知的な宇宙人が存在するとしたらどうだろうか。これについてのカヘインの見解はたいへん興味深い。その場合は、人類はその希少性を失い、外

¹ 引用箇所英文の「*attention is deserves*」の「*is*」は「*it*」の誤植と考えられる。

在的な価値の多くを失ってしまう。

我々の重要性は大規模に希釈されてしまうだろう。宇宙のスポットライトはもう我々に向けては照らされなくなるだろうし、我々が存在することや、我々が存在し続けることなどはほとんど宇宙に違いをもたらさなくなるだろう。我々の達成や、失敗や、その最終結果としての絶滅はもはやたいした意義を持たないだろう。我々はけっして中心ではないし、とくに重要というわけでもなくなるだろう（762頁）。

この箇所を読んで分かるのは、カヘインは、人類が宇宙の中で持つ重要性（significance）と、その重要性の度合いが際立って大きいことに、特別の意味を見出しているということである。人類は宇宙の中で希少な存在だからすごく重要だ、宇宙が巨大で空虚であればあるほど人類の希少性は際立つから、人類はさらにもっとすごく重要だ、というわけである（この点に鋭く批判の目を向けたのがこの次に紹介するグラスゴーである）。

それでは、個々の人間はどうかだろうか。人間個人は significant なのだろうか。カヘインはこの点については無慈悲である。外在的に見たとき、人間は地球上に何億人も存在しているのであり、人間個人はけっして希少性を持っていない。個人としては、人間は「大海の一滴にすぎない」（762頁）。「たとえ人類が宇宙的には重要であったとしても、地上の人間個人は重要性を持たない（we are terrestrially insignificant, even if humanity is cosmically significant）」（762頁）。

すなわち、理性や愛の能力を持つ人類の存在は宇宙において希少であるがゆえに人類は大きな重要性を持つが、個々の人間は地上においてこれらの点で希少性をもたないがゆえに重要性を持たない。個々の人間の人生には significance（意味）がないというふうにこれを解釈すれば、個々の人間の人生は外在的には無意味であるということになるだろう。これがカヘインの結論である。

カヘインのこのような考え方に対して、デイヴィッド・ベネターは大きな異議をとなえている。人間の存在は、誰か他人に、あるいは他の物に対してインパクトを与えることができるときに意味を持つとベネターは言う。このように考えるならば、人間の個人は別の個人に対してインパクトを与えることができるので、個人の人生は個人のパースペクティブでは意味を持つ。同様にして、個人

の人生は、家族、共同体、国家、動物などのパースペクティブにおいても意味を持つ。さらに全人類に対しても確かなインパクトを与える個人は存在するので、全人類のパースペクティブにおいてもまた意味を持つ（27-34頁）。しかしながら、「宇宙的なパースペクティブから見たとき、生命にはまったく意味がない（life has no meaning from a cosmic perspective）」。「我々にまったく関心を持たない広大な宇宙のなかで、我々は無意味な染みである」（2頁）。ベネターはカヘインとはまったく逆に、個人の人生は地球上では意味を持つが、人類は宇宙のなかではまったく意味を持たないと主張する。ベネターによる具体的なカヘイン批判は、鈴木生郎の論説に詳しい。

3 グラスゴウの「重要性衝迫」と「閾値ハイブリッド説」

イド・ランダウは2017年に刊行された『不完全な世界で意味を探す』のなかで、カヘインの名前は挙げていないが、カヘインのような宇宙的重要性への固着を批判している。ランダウによれば、人生の意味の追求において批判すべきことのひとつとして「完璧主義 perfectionism」がある。完璧主義とは、何かをするときに、それを100%完璧にできないのならばそれをする意味はまったくない、というふうに考えてしまうことだ。ランダウは言う。完璧主義にしたがえば、「意味のある人生というものは、何かの完璧性や、卓越性や、稀で難度の高い達成などを含んでいなければならず、このような特質を持っていない人生は意味があるとはみなされ得ない」のである（31頁）。このような考え方には、大きな問題がある。

ランダウは、人間の宇宙的重要性を強調する哲学に対しても、このような完璧主義を嗅ぎつける。そして、宇宙に影響を与えることのできる人生のみが有意味であるとする考え方は完璧主義であると言う。ランダウは、宇宙的なパースペクティブを持つことと、宇宙的な有意味性の基準を持つことを峻別すべきだとし、前者に問題はないが、後者に対しては疑いのまなざしを向ける（95頁）。

「子育てによって子どもたちがすくすくと育っていくのを見る親の多くは、たとえ彼らの子育ての努力が宇宙全体に影響を与えてこなかったことを十分承知していたとしても、自分自身の人生を有意味だと考えるだろう」（96頁）。人生の意味において宇宙全体に影響を与えることなど考える必要はないのであり、

「我々がいまここでなしていることだけでしばしば十分なのであり、また有意味なのである」（98 頁）。こうして、ランダウは、人類の希少性に基いて人類に宇宙的重要性があると考えようようなカヘイン的な思考方法に冷や水を浴びせると同時に、個々の人間の人生に対しても、大切に身近な人々へのケアを行なうことはそれだけで十分に有意味なのだと強調する。

ランダウはさらに、自分は宇宙に影響を与えたいなどとはまったく思っておらず、そのようなことは自分の人生の意味にとって価値がないと断言する。そして、自分は地上においてさえ、いろんな場所にいるいろんな人々に広く影響を与えたいという欲望は持っておらず、彼らがランダウから影響を受けずに幸せで平和な人生を送ってくれたらそれだけで自分は満足だと書いている（98-99 頁）。ランダウはこうやって、宇宙的重要性に固着してそこに人類の価値を見出そうとする思考方法からも、また宇宙に比して人間はあまりにも小さいから人間の存在は無意味だとする思考方法からも慎重に距離を置こうとするのである。

鈴木生郎もまた、我々の人生と広大な宇宙を対比させる思考方法そのものが問題をはらんでいると指摘する。鈴木は言う。「つまり、「広大な宇宙のなかで、私たちの人生にどんな意味があるのか」という問題設定そのものが、むしろ私たちの人生の物語がもつ多様な重要さに目を向けることを阻害しているかもしれないのである」（75 頁）。「「広大な宇宙のなかでは、ちっぽけな私たちの人生には意味がない」という考えには、一見したところ説得力がある。しかし、実際には、こうした考えが正しいように思われてしまうのは、宇宙の広大さに目が眩み、人生がもつ価値を不当に狭く評価しているからかもしれない」（76 頁）。鈴木は宇宙的重要性よりも、人生の意味への物語的アプローチに期待を寄せる。

この方向性を、また別の視点から開拓しようとしたのがジョシュア・グラスゴーである。グラスゴーは、『重要な存在であることへの衝迫—我々の宇宙的非重要性の非重要性について **The Significance Impulse: On the Unimportance of Our Cosmic Unimportance**』（2024 年）において、人間の重要性というものに固着する思考から解放されることの大切さについて多方面から考察する。本のタイトルに「**significance**」があり、副題に「**unimportance**」があることから、この本がカヘインを仮想敵のひとつとしていることが分かるし、実際にカヘインの議論が何度も引き合いに出される。またグラスゴーは、同書では **significance** と **importance** は区別しないと書いている。

グラスゴーは、人々の心の中にあるところの、大きな存在になりたい、重要な人物になりたい、規格外の人間になりたいという本能のことを「重要性衝迫 significance impulse」と呼ぶ（2頁）。私は彼の本のタイトルを「重要な存在であることへの衝迫」と訳してみたけれども、直訳としては「重要性衝迫」である。この衝迫は、もっと有名になりたいとか、リッチでハイスティータスな人間になりたいというような社会的認知に関わるものではない。他人からどう見られるかではなくて、実際に世界にすごい価値を与えることができるような人物になるということがポイントなのである。だから、社会からの認知度がゼロであったとしても、それはぜんぜん構わないのである。自分が実際にすごい人物であればそれだけでよいのだ。そしてその衝迫は、宇宙の中でも目立つようなすごい存在になりたいというところにまで至ることもあるだろう。

しかしグラスゴーは、このような重要性衝迫が人生を息苦しいものにしていくことを危惧し、そこからの解放を探ろうとする。もちろん、貧困で苦しむ地域の人々を救うことのできるような立派な人間になることは素晴らしい。しかし、そのような素晴らしくすごい人間にこの私になる必要はない、とグラスゴーは言う。私の代わりに、誰かがそういう人間になってくれればそれでいいのだ。「苦しむ人々を誰かが救えばそれでいいのであり、救うのが誰であるかというのは問題ではない」（12頁）。そうであるにもかかわらず、私がその救う側の人間にならないといけなってしまうのが、重要性衝迫の根本的な間違いであるとグラスゴーは指摘する（13頁）。同じことは科学的発見についても言える。もし微分積分法をニュートンが発見しなくてもライプニッツが発見していたであろうし、ライプニッツが発見しなくてもニュートンが発見していたであろうし、二人とも発見しなくても第三の学者が発見していたであろう（20頁）。誰がそれを発見したとしても、その発見の善は社会にもたらされ、我々人類の重要性を増加させたと言える（19頁）。そしてそれでいいのだとグラスゴーは言おうとしている。

では、人類全体についてはどうだろうか。カヘインは、人類は宇宙の中で希少な存在だからすごく重要だ、宇宙が巨大で空虚であればあるほど人類の希少性は際立つから、人類はさらにもっとすごく重要だと主張していた。このような方向性に固着することこそがまさに重要性衝迫であり、グラスゴーがもっとも避けたいものである。もちろんグラスゴーも、人類が理性や愛する能力を持つこ

とによって宇宙の中で重要な存在になっていることを否定はしない。しかしながら、冷静に人類の状況を見てみれば、人類はそれほど際立って重要なわけでもない。なぜなら人類は、現状よりももっともっと偉大であれただろうし、不死であれたかもしれないし、もっと大きな愛を持てたかもしれないし、もっと繊細な感受性を持てたかもしれない。だが人類の歴史を振り返れば実際はそうではなかった。人類は現状よりもっと偉大であり得たという可能性を考えると、人類の重要性を持ち上げすぎるのは間違っていると分かるはずだ（39-43頁）。結局のところ人類というのは、すごく偉大なわけでもないが、まったく無意味な存在というわけでもない。「重要な存在だけれども、しかしほんの少しだけ」（7頁）というのがグラスゴーによる人類の重要性の評価である。

ここでふたたび、人間個人の人生に目を向けてみよう。重要性がないのは悪いことではないとグラスゴーは言うのだが、それを一歩先に進めて、重要性がないのは我々にとって「良いことである（good for us）」と主張するのは可能なのだろうか（95頁）。グラスゴーは、可能だと答える。

我々は宇宙の巨大さに比べてはるかに小さいがゆえに、この地上の、宇宙的に見たら小さな価値というものを誠実に抱擁していくことができる。我々は小さいがゆえに、我々の小さな世界のなかで、より小さなものごとを追いつけていってもかまわない。「この我々の短い人生のなかで、我々は愛を作り上げ、人々に優しくする余地を与えられる」（100頁）。我々はコンサートに行くことができる、巨大な宇宙のパワーについて考えをめぐらせることもできる。「誰かを助けよう。大声で笑おう。もし我々がたいして重要でないのなら、それらのことはより簡単に行なえるようになるのだ」（100頁）。

「もし我々が我々の価値をまったくありのままに受け取るならば、我々がなすことができ、またなすべきことは、我々と同じく重要性のない人生を生きる人々の痛みや苦しみや平安やエクスタシーに寄り添うことであり、我々の景観や芸術の美と向き合うことであり、我々の人間関係の痛切さに寄り添うことであり、物事の進むあり方や、我々の世界に内在するたいしたことのない価値を破壊することなしに我々の世界を作り変えることのできる諸々のやり方を受け入れることである」（102頁）。

我々の人生に重要性がないのならば、我々は実に多くの生の軛から解放される。もし我々が重要な存在だったとしたら、我々は立派な人生を生きなければな

らないという制約にさらされるが、もし我々が重要な存在ではないのだったら、人生の失敗も、我々の欠点も、行動の欠如も、さほどすごい問題を引き起こすわけではない。重要性のない人生とは、「良い選択を行なうべきであるという容赦のない強制から解放されることである。価値の専制からの解放である」(105 頁)。もちろん、考慮すべき倫理の問題というものは厳然とある。しかし我々が悩むべきなのは宇宙における人間の位置ではなく、コミュニティにおける人間の位置である (108 頁)。

このように、人間個人の人生に重要性がないのはむしろ良いことであるし、重要性のなさを肯定することによって我々はあの根深い重要性衝迫から解放されるのだ、とグラスゴーは主張する。これがグラスゴーからカヘインへの返答である。

グラスゴーの本にはもうひとつのテーマがある。それは人生の意味の哲学における主観説／客観説の論争に関するものだ。グラスゴーはこの論争に関してハイブリッド説を取るのであるが、それに関してユニークな提案を行なっているので見ておきたい。

人生の意味 *meaning in life* は主観的に決まるとするのが主観説 *subjectivism* であり、客観的に決まるとするのが客観説 *objectivism* である。それぞれの説明については入門書などを参照してほしい。哲学者のあいだで人気の高いのは、この両者を相補的に取り入れたハイブリッド説である。スーザン・ウルフがハイブリッド説に先鞭をつけた。ウルフによれば、人生の意味は、「愛するに値する対象を愛すること、そしてその対象に積極的に関わろうとすること (*loving objects worthy of love and engaging with them in a positive way*)」から生じる (Wolf, 2010, 8 頁)。ウルフはさらに、人生の意味は「客観的に魅力あるものごとに対して、主観的に引き込まれるとき (*when subjective attraction meets objective attractiveness*)」に生じると説明する (9 頁)。要するに、単に客観的に価値のあること (たとえばボランティア活動など) に関わるだけで人生に意味がもたらされるのではなく、その価値あることに主観的にのめり込むようにして積極的に没頭できるときに人生に意味がもたらされる、というわけである。客観側の価値と、主観側ののめり込みの双方が揃ってはじめて、人生に意味あるものがもたらされるのだ。ウルフのこの考え方が、今日のハイブリッド説の基本形とみなされている。

ウルフのハイブリッド説に理解を示しながらも、それとは別の形で人生の意

味を定義したのがサディアス・メッツの根本性理論（fundamentality theory）である。メッツはその説を段階を追って展開しているが、ここではもっとも簡単な定式を見ておく。それはこのようなものである。「人間がその合理性を人間存在の根本的な諸条件に対して積極的に振り向けるというやり方で、自身の理性を運用すればするほど、その人間の人生はさらにいっそう有意味なものになる」（222頁）。要するに、人類の生の基盤を構成する真善美を促進するようなやり方で自分の理性を運用すればするほど、その人の人生は有意味なものになるというのである。メッツはみずからの説を客観説に含めたいようだが、仮に理性の運用によって客観的な結果が出なくてもその人の人生には意味があるとメッツは考えているから、これをハイブリッド説だとみなすこともできそうである。すなわち客観的な価値とは人類の真善美であり、主観的なのめり込みとは理性のその方向への運用である。

さて、メッツの定式を見て気づくのは、そこにグラスゴーの言う「重要性衝迫」が見え隠れしていることである。すなわちメッツは、人生が「さらにいっそう有意味なもの」になるための条件を考えているのである。さらにいっそう重要性が増すことが大事なのだ。実際、グラスゴーはメッツの定式に言及し、「人生プロジェクトや人間関係や探求が価値あるものになればなるほど、それはより多くの意味を人生に追加する」という発想があると指摘する。グラスゴーはそれを「エスカレーション前提（escalation premise）」と呼ぶ（80-81頁）。そしてグラスゴーはこのような考え方を否定するのである。

グラスゴーは、独自のハイブリッド説を提唱する。以下は森岡による説明であり、グラスゴーはこのような説明はしていないが、グラスゴーの言いたいことは以下で言いたい理解可能であろう。

私がボランティア活動をするときに、私のボランティア活動への主観的なのめり込みが私の人生に意味を与える。そしてボランティア活動の客観的な価値というものは、私の人生にいっさい意味を与えない。ただし、このとき、このボランティア活動は社会的に見て最小限の価値を有している必要がある。この最小限の価値のことをグラスゴーは「閾値 threshold」と呼ぶ（87頁）。この閾値を超えているような活動に私がのめり込むとき、その主観的なのめり込みが私の人生に意味を与える。では、もし私の活動がその閾値を超えていないとすればどうなるだろうか。たとえば、朝から晩まで庭の雑草の葉の数をただ無目的に数

えているだけの活動だとしたら、それはこの閾値を超えているとは考えられない。したがって、たとえ私がいくら雑草の葉数えにのめり込んでいたとしても、それは私の人生に意味を与えはしない。主観的なのめり込みの程度が増加すれば、それは人生の意味を増加させるように働くが、客観的な価値の程度が増加したとしても、それは人生の意味を増加させるようには働かない。客観的な価値は、閾値によるふるい分け機能としてのみ人生の意味に関わるのである。

グラスゴーは、ここでふたたび重要性の論点を持ち出して、それを人生の意味へとつなげる。人間の活動の重要性は客観的な価値であるから、その重要性がどれほど増大したとしても、それは人間の人生の意味の増大には寄与しないというのがグラスゴーの結論である。ある活動の「客観的価値が最小限の閾値を上回っているのならば、どのくらい大きな人生の意味を我々が確保できるかを決定するものは主観側なのであり、客観側ではない。そして我々の人生プロジェクトがとてつもなく重要であるかどうかということもまた、それを決定しないのである」（89頁）。

グラスゴーは、この閾値の線引きが具体的にどこでなされるのかを知るのは難しいと認めている。ウルフの言うように、一生ずっとくだらないテレビを受動的に観ている人生は閾値を下回るだろうし、演劇芸術に積極的に関わっていくような人生は閾値を上回るだろうが、その中間ゾーンはどうすればいいのだろうか」とグラスゴーは問う（87頁）。このあたりの考察を読んで思うのは、グラスゴー自身もまた主観的側面に関しては「エスカレーション前提」に陥っているのではないかということと、テレビの例を出すあたりはウルフと同様のエリート主義に陥っているのではないかということである。

それにもかかわらず、グラスゴーの「閾値ハイブリッド説」（森岡の命名）は真剣な検討するに値する説であると私は考える。

3 まとめ

カヘインとグラスゴーの論説を中心に、人類および人間個人の重要性についての考察を紹介してきた。彼らの論点を整理すると以下のようなになる。これらはすべて外在的な視点からの重要性である。

(1) 人類の重要性について

パスカルは、人類の存在は卑小であるが、理性を持っているという一点において人類は重要性を持つとした。カヘインは、人類は理性存在として宇宙において希少性を持つので、宇宙において重要性を持つとした。ランダウは、宇宙的な重要性に固着することそれ自体を批判した。ベネターは人間に宇宙的な意味はないとした。鈴木は、我々の人生を広大な宇宙と比較して考える問題設定そのものに問題があるとした。グラスゴーは、人類の存在には重要性があるとは言えるが、さほど大きなものとは言えないとした。

(2) 個人の存在／人生の重要性について

カヘインは、個人の存在は人類社会において希少性を持たないため、重要性を持たないとした。ベネターは個人の人生に地上的な意味はあり得るとした。グラスゴーは、個人の存在や人生が人類社会において重要性を持たない場合においては、個人は価値の重みから解放されて生きることができるので、それは良いことであるとした。

(3) 個人の個々の行為の重要性について

グラスゴーの閾値ハイブリッド説によれば、個々の行為の客観的重要性は、人生の意味の増大には影響を与えない。たんに閾値としてのみ働く。

これらの議論を見て思うのは、それがもっぱら外在的な視点からの重要性を中心として行なわれているということである。では、内在的な視点からの重要性についてはどう考えればいいのか。たとえば、私がいまここで生きていることは、他の誰とも比較することなしに、それ自体において重要であるとも言える。この重要さは、地球上の他の人間との比較においてなされたものではなく、また宇宙の広大さとの比較においてなされたものでもない。私がいまここで生きており、そのかけがえのなさは何ものとも比較できないという意味で、私の人生には重要性があると言っているのである。私が広大な夜空を眺めるとき、宇宙の広大さは私の内面から見て取られている。私が広大な宇宙について思索をするとき、宇宙の広大さは私の内面の思索をとおして把握されている。このような側面に着目すれば、私の内面から把握された宇宙の重要さと、私の存在の重要性はその価値において釣り合っていると考えることもできる。もちろん私の内面

から把握された宇宙と、外在的で客観的に存在する宇宙とはまったく別物である。しかし私はその外在的で客観的な宇宙というものを私の内面の理性の働きを起点とすることなしに、どうやって把握することができるのだろうか。かくしてこの問題は、伝統的な観念論と実在論の問題系に接続することとなる。このような側面からの重要性の問題の検討も必要である。

さて、冒頭に言及したカヘインによるパスカル『パンセ』の論点に戻ろう。カヘインは、パスカルが無限の空間の永遠の沈黙について書いたと言う。しかし、カヘインのパスカルの扱い方はきわめて一面的である。『パンセ』のなかでパスカルは人間と比べたときの宇宙の無限の大きさについて述べると同時に、宇宙の中に存在する微小なものに比べれば人間は圧倒的に巨大だ、とも主張しているからである。パスカルにとって人間とは、無限に巨大な宇宙と、無限に微小な存在の、その両者に挟まれて宙づりになるようにして存在している悲惨な存在である。問題なのは、人間が宇宙に比べて圧倒的に小さいということではなく、人間が極大からも極小からも無限に引き離されて存在しているという悲惨なのである。『パンセ』のラフユマ版断章 199 から引用しよう。

199 …… (中略) ……けれども、人間にいま一つの驚くべき不可思議を見せるために、人間は自分の知っているもののなかで、最も微小なものをさがしてくるがいい。たとえば、一ぴきのだには、その微小な身体において、くらべものにならないほどいっそう小さな諸部分を、関節のある脚を、人間に示すであろう。さらに、その脚のなかに血管を、その血管のなかに血を、この血のなかに液を、この液のなかに滴りを、この滴りのなかに蒸気があるのを示すであろう。…… (中略) ……さきに万有のふところであつてそれ自体眼につかないほどの宇宙のなかで、有るか無きかのものにすぎなかったわれわれの身体が、いまや、何びとも到達しえない虚無との比較においては、一つの巨像、一つの世界、あるいはむしろ一つの全体である。誰か、これに驚かない者があるろう？²

(中略) ……なぜなら、そもそも人間は自然のうちにおいて何ものであ

² 長くなるので中略したが、パスカルはダニの内部にさらに大きな宇宙があり、その宇宙のなかにさらに別のダニがいるというフラクタル的なヴィジョンを展開しているので、この箇所²の全文は必読である。

ろうか？ 無限に比しては虚無、虚無に比しては全体、無と全体とのあいだの中間者。両極を把握することからは無限に遠く隔てられているので、事物の終極やその始原は、人間にとっては、しょせん、底知れぬ神秘のうちに隠されている。彼は自分がそこから引き出されてくる虚無と、自分がそこへ呑みこまれていく無限とを、ともに見ることができない。

そうだとすれば、人間は事物の始原をも終極をも知り得ない永遠の絶望のうちにあって、ただ事物の中間の姿を認知するほかに、何をなしえようか？ 万物は虚無から発し、無限へ向かって運ばれていく。

無限と虚無のあいだの宙ぶらりんの中間者であらざるを得ないという絶望こそが、人間存在の本質的なあり方である。そしてこの直後の断章 200 で、パスカルは言うのである。

200 人間は自然のうちで最も弱いひとくきの葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。・・・(中略)・・・それゆえ、われわれのあらゆる尊厳は思考のうちに存する。われわれが立ち上がらなければならないのはそこからであって、われわれの満たすことのできない空間や時間からではない。それゆえ、われわれはよく考えるようにつとめよう。そこに道德の根原がある。

思考のみが、この宙ぶらりんの人間の尊厳を支えるものである。そしてこの直後の断章 201 でパスカルは書く。

201 この無限の空間の永遠の沈黙は、私に恐怖をおこさせる。

パスカルの言う無限の宇宙の永遠の沈黙の恐怖は、以上のような文脈で理解されなくてはならない。宇宙は人間に比べたら無限に大きいから恐怖を感じる、というような単純な話ではない。カヘインによる『パンセ』からの引用の仕方では、これら一連の文章に横溢する重厚な意味世界がすっかり抜け落ちてしまう。もちろんカヘインも「考える葦」については論文内で簡単に引用する。しかしカヘインの結論はこれだ。「しかしながら、われわれがすでに見たように、それだけ

では役には立たない。我々が[思考のような]価値を有しているという事実だけでは、我々の重要性を確立するには不十分なのである」(754頁)。この書きぶりでは、パスカルの思索への誠実性が欠けているとみなされても仕方ないであろう。逆に言えば、中間者としての人間という(ルネサンス由来の)人間像を現代の人生の意味の哲学に導入するとどのような思索が導かれるかは、興味深いテーマである。三木清は『パスカルにおける人間の研究』で、パスカルの人間観の基本をこの「中間者」に見ている。「中間者の名は人間性そのものに対する基本的なる表現である」(15頁)。『パンセ』には、外在的には無限と虚無のあいだの中間者という人間観があり、内在的には思考によって宇宙に匹敵することができるという人間観がある。この二つの点が人生の意味にどう寄与するのか、しないのかは十分に考察の余地がある。

以上、最近の人生の意味の哲学におけるトピックスを紹介して検討した。読者によるこの分野の研究の一助になれば幸いである。

* 本論文は、科学研究費 23K00039 および 24K00001 の成果である。

文献一覧

Benatar, David (2017). *The Human Predicament: A Candid Guide to Life's Biggest Questions*. Oxford University Press.

Glasgow, Joshua (2024). *The Significance Impulse: On the Unimportance of Our Cosmic Unimportance*. Oxford University Press.

Kahane, Guy (2014). "Our Cosmic Insignificance." *Noûs*, 48(4):745-772.

Landau, Iddo (2017). *Finding Meaning in an Imperfect World*. Oxford University Press.

Metz, Thaddeus (2013). *Meaning in Life: An Analytic Study*. Oxford University Press.

Wolf, Susan (2010). *Meaning in Life and Why It Matters*. Princeton University Press.

鈴木生郎 (2023) 「広大な宇宙のなかでちっぽけな人生に何の意味があるの

か」、森岡正博・蔵田伸雄編著『人生の意味の哲学入門』春秋社、53-78 頁。
パスカル、ブレーズ (1971) 『定本 パンセ (上)』松浪信三郎翻訳・注、講談社文庫。
三木清 (1980) 『パスカルにおける人間の研究』岩波文庫。